

◆三田評論と昭和一〇〇年

学生スポーツと体育会

石川忠雄

(慶應義塾体育会理事)

問 体育会というと一般の人々から慶應義塾の学生団体のなかで何か特殊なもののように考えられているようですが、体育会に入っている学生は何人ぐらいで、全塾生の何割にあたりますか。また体育会には誰でも入れるのですか。

石川 体育会といっても、そのなかには大学の学生のほかに、日吉、志木及び女子高等学校の学生を含んでいます。大体正式に登録されている者が二千七百人ぐらいだと思います。そのうち大学は約千九百人、大学だけの場合、学生の約一割が体育会部員ということになりますね。

体育会には正規の塾生、すなわち通

信や外語を除いた学生なら誰れでも入れます(編集部注…実際には当時も現在も通学課程、通信教育課程とも塾生であることを区別していない。但し、体育会はその会則により、通学課程に限っている)。

ただし施設の面で多少制限を加えなければならぬ部があります。いずれにしても体育会のきびしい訓練にたえられる体力と精神力を持った人でなければなりません。

問 体育会に入ると、練習が激しくて勉強をする時間がないと云われておりますが。

石川 体育会の建前として、原則として各部とも学校の授業に出られるようにスケジュールを組んでおります。体

育会の部員であるということの前にかれらは学生なので、授業に出るのは当然ですね。実際各部とも練習は午後三時頃からやっております。たしかに練習が忙しいから、それが終わったあとで勉強するのは大変でしょうが、それを両立させるよう努力するのが当然ですし、またそれができなければならぬと思っています。

問 塾の入学試験がむずかしいため、有名な選手が入学出来ないと聞いておりますが。

石川 たしかにそのとおりですね。私のみるところでは、現在の高校及び大学のスポーツには学生スポーツの範囲を逸脱しているところが多いように思います。高校の場合、運動をやる学生には運動さえ出来れば、勉強が出来なくとも大学へ入学しやすいというような考えがうえつけられたり、運動団体や競技団体が熱心のあまり、教室へ出ることをより練習することをすすめるような傾向もあるようです。一般的にいうと高校の運動選手の学力は低下する

傾向がありますね。

著名な選手が塾の入学試験を受けても入りにくい。そのせいか最近では成績が良くなれば入学出来ないといつてあまり学業に自信のない選手ははじめから入学試験を受けに来なくなりましたよ。

問 そういう点で他の一部の大学と比べて、ハンディキャップが大きいと思うのですが。

石川 いまでも申しましたように、優秀な選手が入学しにくい。こういったことは学生スポーツとしてやむをえないことだと思うのですが、たしかに或る意味では他の大学にくらべて不利な点だと思います。しかし、われわれとしては、やはり学生スポーツの本来の姿をできるだけもりながら、なんとか体育会をよくしていきたい、こう考えているわけです。その点で、先輩の意見もきき、いろいろと研究してみました。その結果えられた結論の一つは、基礎体力を強化することです。現在、ウエイト・トレーニングを

行う設備をととのえておりますが、これなども基礎体力をつける努力の一つの現れです。まず基礎体力をつけ、その上に各部の技術的向上をはかる練習をやっていくということが必要だと思っています。

問 学生スポーツのあり方について、どのようにお考えですか。

石川 一般にこういう考え方が成り立つかどうかわかりませんが、現在の日本では学生スポーツがアマチュアスポーツのほとんどすべてであると考えられ、その結果、学生スポーツにあまり大きな負担がかかりすぎているように思います。学生スポーツがアマスポーツのほとんどすべてであり、学生の選手が日本を代表する選手となる。学生として扱われるよりはなにか社会人化して扱われているような傾向がつよいような気がします。そういう傾向はオリンピックをひかえて現在ますます激しくなっているようですね。

学生でありながら、オリンピックだといつては勉強をしないで練習する

し、海外遠征も学校の授業にはおかまいなしに行われる、学生の身分が先行したスポーツであるということを、その指導者が忘れてしまっているのですね。海外遠征にはほとんど行け、学校はさぼって練習しろ、はなはだしきにいたってはプロと同じ練習とか生活が学生の中に入ってきているようなところもあるようです。学生スポーツとしてこういうことでは甚だ困るのではないでしょうか。学生スポーツを指導する人たちは、野球とかラグビーとか、サッカーが強くなつてほしいでしょうが、学生にとつてはそれが全てではないのですからね。

私は学生が記録に挑戦したり、技術をたかめたりする努力をすることが必要でないといっているのではありません。それは是非とも必要だと思えます。なぜならばその目標に向つて努力することによって、その人のつよい精神力、体力がつくられていくからです。しかし、学生スポーツ本来の姿は、それが学校教育の一環として、行

われることだと思います。いいかえれば学生生活の中で学業と並んで学生がきびしいスポーツの訓練をうけ、それを通じてかれらがつよい体力、精神力を身につけていくことにあるのだと思います。日本スポーツ界の指導者が、もし日本スポーツ界の重荷を学生スポーツがすべてを犠牲にして一身に受けなければならぬと考えているのだとするならば、一考をうながしたいと思います。私の感じでは、今の学生スポーツは、すべてとはいいませんが、学生スポーツではなく、セミ・プロのような感じさえします。

問 しかし今の日本の状態では、学校を卒業して就職でもすると、ほとんどスポーツなどやれなくなってしまうのではないのでしょうか。

石川 最近たとえばリッカー・ミシンとか、八幡製鉄などのようにスポーツに非常に力を入れるところがでてきました。私としては社会人スポーツがどんどん発展して、学生スポーツの役割が少しでも軽減されることを希望して

います。

問 では塾の体育会の今後の計画等をお話したいのですが。

石川 まず第一に部員についての問題ですが、体育会がとってきた「知育と体育」の両立という方針は、今後も体育会の基本原則として守って行きたいと思っています。従ってこの原則を達成するために現在行っていること、たとえば語学の補習などは今後も続けて行くつもりですし、出来ればそれを拡大していきたいと思っています。

部員の指導で二、三感じていることは、どうも現在の体育会の部員に共通する欠陥ではないかと思われるのですが、「自主、独立」の気力と云うか、気魄というか、そういうものが少ないのではないかということです。具体的に申しますと、学生には先輩なり、学校当局、あるいは監督などにたよりすぎている面がありはしないだろうか。何か問題を処理しなければならない場合、最後には先輩あるいはその他の人々に何とかしてもらえないのではない

かと、またそれを最初からあてにして仕事をするような安易な傾向があるのではないか。この点については指導する側にも責任があると思うのですが、部の運営はすべて学生自身の責任であるという考え方はつきりさせ、それにもとづいて、自分達で出来るだけのことを処理する習慣をつける、こういうことが必要ですね。その結果として多少の失敗が出てきても止むを得ない。一番大切なことはこの自主独立の気力を強く持たせることですね。学生にどうして俗にいう根性をつけさせるかということを先輩の方々とも相談していま真剣に考えているわけです。

問 現在体育会には三十三部あるわけですが、種目によってその訓練、規律等大分ちがっているのではありませんか。

石川 私はそこに問題があると思っています。おっしゃるとおり、部によって伝統も気風もちがいますし、現在の状態をとってみても、規律、礼儀正しさなどについて部によって差があります。この各部門の差を出来るだけ少く

して、全体として体育会を立派なものにしていく必要があると思っております。その意味で各部の交流がもつと、

もつと必要ですね。とかく伝統のある古い部に重点をおきがちになるのですが、私はむしろ格差のある部にできるだけ気をつけて、全体として体育会の規律、気風を高いものにしていく努力をしていきたいと考えております。

次に先ほども話が出ましたが、慶應義塾の体育会は他の一部の大学と比べて、競技で強くなるという点からみると、いろいろと不利な条件のもとおかれています。このような条件の中で私たちは凡ゆる努力をして体育会をなんとか強くしていきたいと考えています。その点に関連して、結局帰着した結論の一つは、基礎体力を強化することでした。体育会を強くするということには、勿論技術の問題もありますが、根本的にはまず基礎体力を強くすることが必要なのです。昨年来サーキット・トレーニングの話が出ており、これが果して全ての運動に適し

ているかどうかわかりませんが、今後これを具体化するようにしていきたいと思っております。

問 体育会部員の数も年々増加しておりますが、施設の面は現在どうなっておりますか。

石川 体育会部員の増加にともない、出来るだけの努力をして施設の改善を計っていますが、まだ決して充分ではありません。もしこの調子で体育会が大きくなっていくとすれば、かつて葉山が使えなくなつたと同じように、中山荘も十分でなくなるかもしれません。言い換えますと、どうしても体育会全体として施設の面で大きく脱皮しなければならぬ時期に来ていると思います。館山の南の塩見というところに約一千八百坪の合宿用敷地を購入したのでありますが、ここの建設の問題、老朽化して行く三田綱町の体育施設をどうするか、又立科に山中にかわる広い体育会用の土地を用意する動きも現在出ていますが、これらが将来の体育会の施設の面で最も大きな問題ですね。

これらの問題に関連して財政の問題があるわけです。現在慶應義塾は、医学部、三田、日吉を通じていろいろの建設事業を行っており、財政的に体育会まで手がまわりかねる状態です。また実際、それを学校に要求するのも酷なことだと思います。もちろん、学校に対して最大の協力はお願したいのですが、それ以外に、体育会自身が何らかのかたちで収入源を持つことが必要になってきているのではないかと思います。施設の拡充の問題と併せてこの収入源の問題は今後研究しなければならぬ非常に重要な問題だと思っています。

（聞き手 土井婦紗子）
【一九六二（昭和三十七）年六月号（六〇五号）掲載】

（石川忠雄（塾長在一九七七―一九九三）の体育会理事時代のインタビュー。石川は体育会に強い関心を持ち、体育会理事を三回務めている他、柔道部長、バレーボール部長、應援指導部長も務めた。）